広島での２日間

杉下小学校　六年　久保田　結心

私は、７月３０日から７月３１日の２日間、「戦争」ということが、どれだけおそろしくて怖いものなのかを知るために、原爆が落とされた場所、広島へ行ってきました。私は、この２日間で、多くのことを学びました。その中でも、特に心に残ったことが２つあります。

１つ目は、原爆ドームは、なぜ今も残っているのかということです。爆弾が落ちる前の原爆ドームでは、相談や講習会などをするために利用されていました。では、なぜ爆弾が落ちても原爆ドームは、残ったのかというと、爆弾が落ちた場所は、爆心地から上空６００ｍ上で爆弾が落ちました。原爆ドームの上から爆風を受けたため、まどが爆風を守りきせき的に残ったと言うことです。しかし、上から爆風を受け原爆ドームが残ったとしても、たくさんの人々の命が一しゅんにして消えた

20 × 20

ことは、もうもどりません。私は、もし自分が原爆ドームの中にいたらと考えたら、とても複雑な気持ちになりました。

２つ目は、平和記念資料館で学んだことです。平和記念資料館では、爆弾が落ちたときにもっていた、水筒やお弁当、洋服、ぼうし、爆弾が落ちた後の町の様子などの写真や物がたくさんおいてあります。そのほかにも佐々木禎子さんの話が一番心に残りました。佐々木禎子さんは、１９４３年生まれです。禎子さんは、２才の時に、爆心地から、約１．７キロメートルの自宅で被爆しましたが、やけどもきずも負わず元気に成長しました。ところが約１０年後の小学校６年生の時に白血病と、しん断され、８カ月間病院で生活することになりました。病院では、千羽鶴を折れば元気になると信じて、鶴を折り始め、８月の終わり頃には１３００羽を超える鶴を折りました。しかし、体調は悪化し、１９５５年１０月２５日午前９時５７分お茶漬けをたくあ

んと共に食べ、亡くなりました。私は、この話を聞き、多くのことを学びました。そして、人が苦しい思いをしてまで爆弾を落とさないといけなかったのかな、とたくさんの疑問が出てきます。また、このような話を聞いて、疑問だけでなく、悲しい気持ちや、苦しい気持ちが出てきました。一つ言えることは、人が笑顔になるような話ではないということです。私は、この二日間で、戦争の悲惨さ、恐ろしさ、平和のとおとさ、安心さを学んできました。私が一番思ったことは、争いの終わりを目指すのではなく、争いの始めをさせないということです。私は平和がどれだけ大切なのかをみなさんに一番知ってほしいです。一人一人が争いの悲惨さを知っていれば、戦争というものが少しでも少なくなると思います。